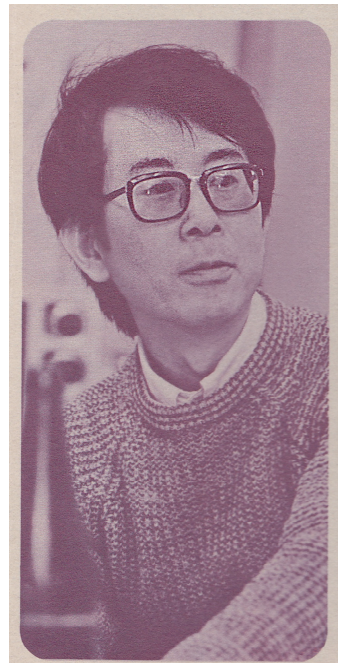


辻 征夫

『学校の思い出』など、初期詩集から



辻征夫氏(1939年～2000年)

目次

野の花 2

*

木 3

沈黙 4

池袋 土曜の午後 6

*

隅田川まで 8

いま α がむこうへ歩いて行った 11

挨拶 12

渚 13

*

落日——対話篇 13

雨 15

付記 16

著者略歴 16

野の花

——お花を買ってください

ぼくは夢の中で

小さな花売りの声を聞きながら

もう一度 野の花の

香りを思い出してみようかと思っていた

——お花を買ってください

ぼくは夢の中で

見知らぬ花売りの声を聞きながら

もう一度 野の花を

魂の胸にかざってみようかと思っていた

——お花を買ってください

——お花を買ってください

ぼくは苦しい夢の中で

大勢の花売りの声を聞きながら

花を買うほどの金はないが

ただ心の底から

ぼくに野の花を！ と叫びさえすれば

与えられるべきだと思っていた

ぼくに野の花を！ と叫びさえすれば

——お花を買ってください

——お花を買ってください

——お花を買ってください

ぼくはただ

一つの言葉が言えないであせっていた

ただ一つの言葉が

——お花を買ってください
声がかれ 魂が枯れて
ぼくに野の花を
ぼくに野の花をください と

木

木は
最後まで木でなければいけない
夢の中で幻想の水辺で
いつも黒々と
つめたくそびえていなければいけない
木が木でなくなるとき
葉が葉でなくなるとき それは
天に向つてのびる
一本の直線にもなつてしまつて
はてしないその虚像に
地上の生命は胸しぼられるのだ
いつまでも
木は木でなければいけない
海辺の風に星屑のぬれた賛歌に
木はいつまでも木のままだに
梢ざわめかせときに落葉をふりまき
いつまでも立つていなければいけない
木がそのふとした無聊に

さまざまな問の答えとなつて
ささくれた木肌をさらすとき
人はすでに木のもとに憩い
木の蔭に語らうこともできないのだ

木は

いつまでも木でなければいけない
とある少女の名を彫りつけられ
朝まだき少年の唇の夢をうけとり
木はいつまでも
そうして木でなければいけないのだ

沈黙

いきなり電話が鳴つたので
ぼくは目覚めてしまったのだ

夢の中でぼくは
一冊の詩集を読んでいたのだが
その中の一篇がすばらしかった
思わず
すばらしい とぼくは呟き
夢だなぞとは夢にも思つていなかった

だが 目覚めたとたんに
ぼくは忘れてしまったのだ

どんな詩であつたか
だれの詩であつたか
みんな なにかも

ぼくは忘れてしまつたのだ

電話の向うでは

友だちが言つてゐる

もしもし もしもし

今日 会おうよ

一時に？

二時に？

三時に？ もしもし

一時に 二時に 三時に

ぼくは友だちに会うだろう

そしてぼくらは語るだろう

夢のことではなく

現実のぼくらの生活について

ぼくらの今日と

明日の不安について

とめどもなく

ぼくらは語らねばならぬだろう

そして 語つてもなお

ぼくは思い出せないだろう

あの美しい

幻

いつまでも

ぼくは思い出せないだろう

そして書くこともできないだろう

ぼくは友だちに言う

すばらしいことはみんな夢の中で起つた

ぼくらはそれを思い出せないで暮している

一篇の詩

ぼくらの苦しみでは創り出せない詩

それを思い出そうとしてぼくは歩いている

ぼくの 沈黙を許したまえ と

池袋 土曜の午後

土曜の午後 池袋で

まだ忘れない恋人に ばつたり出会つた

彼女は片手に ハンドバッグを持ち

片手で 小さな男の子の手をひいていた

土曜の午後 池袋で

二人で じゃない三人で 歩いた

語るべきところの問題は かつて語りつくし

その他のはなしはそらぞらしい だから

黙つて歩いた

土曜の午後の 池袋を

レストランで 食事をした

ぼくは食事をすませたばかりだった

彼女はぼくに 大きなケーキを食べさせたがり

ぼくは食べた——おなかはもういっぱいだったから

こんどいつぱいになるのは どこだろう

デパートの 食品売場で買物をした

今日は土曜日で

彼女の×が

友だちをマージャンによぶ日

ぼくは選んだ チーズ 燻製ニシン 即席ラーメン

ビールは あなたのうちにあるだろう

ぼくはマージャンはできないけれど

徹夜には ざつとこんなものが必要

それから 彼女はぼくを

自分のうちにつれて行きたがり

ぼくは首をふつた もちろん横に——

ね もう過ぎ去つたことなのだから

みんなにも知らないし

それに知っていたつて少しもかまわない——

いやだめ ぼくは行きたくない

会いたくない彼に 今日

ひとりで帰れたまえ

たぶん これからもずつとひとりで！

彼女はぼくを

駅まで送ってくる

(送るだけならいいでしょ！)

駅で

電車がきて

ぼくはそれに乗り

それから ドアがしまる

すると電車は――別に不思議じゃないのだが

ゆつくりと 動きはじめる

土曜の午後の 池袋の駅を

隅田川まで

――作文の試み

わたしは四時半に起きた

わたしは今日四時半に起きた

あんまりさびしいねむりなので寝て

いられなかったのだ

まだぬくもりのさめないわたしのベッドに

よこたわっているあたたかいもの

あれはわたしの悪夢である

悪夢は 三度もわたしに言ったのだ

《おまえのおかげでわたしはねむれない！》

ああ 悪夢にさえも疎まれて

わたしはどうしたらいいのだろう

ともかく これ以上寝ていたら悪夢に御迷惑

とわかったのでわたしは起きたのだ

これが早起きの理由だ

わたしは歯を磨いて顔を洗った

わたしは起きて 歯磨で

歯を磨いて顔を洗った

歯はていねいに磨いた顔はさっと洗った

水でなんどもウガイをした

わたしは鏡の中の

わたしを眺めながらそうしていたのだ

鏡の中の つまり鏡の外の

わたしはすこし疲れているようだった

そしてわたしには薄青くヒゲがはえているのだった

わたしはいつからこういうわたしだったのだろう

おととい わたしは子供だった

きのう わたしは少年だった

なぜか知らず逆上して突走っていた そしていまは

わたしはこういうわたしなのだ 水で

もういちどウガイをした

パンを齧りながらわたしはこわい

固くなりかけた

パンを齧りながら眺める夜明けよ

暗い堤^{ハシ}荘の壁よ

この都会に住みすぎて

わたしは沈黙に耐えられないわたしになりそうだ

沼のように 暗い 地下の沼のように

わたしのなかにあるらしいわたしの沈黙

わたしはそこに沈んで行こうとするわたしがこわい

やすらかに まだねむっているわたしの悪夢よ

わたしの歯磨と歯ブラシよ

双眼鏡と鉄垂鈴よ

地球儀よ

きみらで武装してもなおわたしはこわい

パンを食べても 水を飲んでも……

五時に雀が目をさました

五時に

雀がいつせいに目をさました

六時には雨が降っていた

七時にはなにも降っていなかった

そして七時すぎにはわたしはジャンパーを着て

冬の街路に出た

背をまるめ

首をすくめ

隅田川まで歩いた

(隅田川は夜明けに

小川のせせらぎのようなかすかな

音をたてて流れる

わたしはそれをなんとかきいたことがある)

だがいまは せせらぎはきこえず

川ぶちの工事現場で

男が四人焚火をしようとしていた

わたしはそこへ行った

ゆがんだドラムカンの中で

重油と丸太が燃えあがった

わたしは火を見つめ

河を見つめ

わたしにタバコをすすめる男の

武骨な手を見つめた

いま*a*がむこうへ歩いて行つた

痩せた背中が風に吹かれて

*a*あなたが

歩いて行くなと思つていると

あなたは ふいにふりむいた

すると それは

あなたではなく

*i*あなただったので

なんだ

*i*だったのかと

かんがえた……

すると *i*

あなたは急に

ひきかえし

わたしの

前に立ち

わたしを

のぞきこんで

言った

いまαがむこうへ歩いて行った

そのうしろ姿をおまえは見ていた

おまえは呼びとめもしなかった

なにかあったのか

話してごらん

わたしに

挨拶

——結婚に際して

いくこよ

おれのあたまのなかは

いつもいつも夕焼けなんだ

夕日が八輦乃至十輦連結で

次から次に沈んで行く……

いくこよ

おれを夏または秋の

日暮れの

燃える空だと思え

やがて来る（だろう）

おれの夜には

星はおまえが輝やかせよ

渚

海辺にこうして

黙って立っているのも何年ぶりのことだろう

普段の暮しのぼくのすがたと

あんまりちがうからおちつかなくて

あの貨物船にはあの夕日の破片が落下して

沈めてしまえばいいなんて思ってしまった

海はたしかにすばらしい　できればいつまでも

こうしていたいがそうするためには

ぼくには責任感がありすぎるのだろうか

すべての鷗に告げるため

渚の端から端まで

叫んで　怒鳴って

もう走って行かねばならない時刻だ

鷗よ

もうじき夜で

寒くて暗いぞ

あしたの朝まで

ずうつと夜だぞ

知らないぞ

落日——対話篇

夕日

沈みそうね

.....

賭けようか

おれはあれが沈みきるまで

息をとめていられる

いいわよ息なんかとめなくても

むかしはもつとすてきなこと

いったわ

どんな？

あの夕日の沈むあたりは

どんな街だろう

かんがえてごらん

行ってふたりして

住むたのしさを…

忘れたな

どんな街だったの

行ってみたんでしょ

ひとりで

ふつうの街さ

運河があつて

長い塀があつて

古びた居酒屋があつた

そこでお酒のんでたのね

のんでたら

二階からあの男が

降りてきたんだ

だれ？

黒い外套の

おれの夢さ

おれはおもわず匕首を抜いて

叫んじやった

船長 おれだ 忘れたかい？

ほんと？

ほんとさ

……………

沈みそうね

夕日

雨

私が眺めている隣家の庭の、日だまりはいつのまにか消えつめたい風が塀の外から内へ吹きこみはじめた。細目の丸太二本の間に竹竿を掛渡した物干し場のむこうの、公孫^い樹^ちの木の公孫樹^{よう}の葉のことごとくが忙しくふるえ、梢のヒヨドリも一声鳴いて飛び去ってしまった。そして次にきたのは上空からの水滴で、それははじめ一メートル四方に七つくらいの割合で乾いた地面のしみとなっていたのだが、あちらでは豆粒、また別の所ではほぼおはじき位だと、観察する間もあろうものかは、もっと重い、集団となった水滴が落ちてきはじめ、私の住むアパートの窓の波形塩化ビニールの庇や、左手に見おるせる小さくはないトタン屋根の全表面でかまびすしい音をたてはじめ見事なDOSHABURIとなってしまうのだ。そしてこうなればもう、雨のとる形の二つ二つの、独特の勢いに見入るよりもむしろ、隣家の閉じた書斎の窓に礫^{りせ}を投げ、大声で知らせてあげるべきではないだろうか。

ポンジュさん、洗濯物が出ているよ！

註 太字の部分は、フランシス・ポンジュの「雨」（阿部良雄氏訳）から。

〈付記 収録詩篇について〉

野の花

——詩集『学校の思い出』（一九六二年・思潮社）から

木 沈黙 池袋 土曜の午後

——詩集『いまは吟遊詩人』（一九七〇年・思潮社）から

隅田川まで いま α がむこうへ歩いて行った 挨拶 渚

——詩集『隅田川まで』（一九七七年・思潮社）から

落日——対話篇 雨

——詩集『落日』（一九七九年・思潮社）から

辻 征夫（つじ ゆきお）

一九三九年、浅草に生まれる。主な詩集に、『学校の思い出』（一九六二年）、『いまは吟遊詩人』（一九七〇年）、『隅田川まで』（一九七七年）、『落日』（一九七九年）、『かぜのひきかた』（一九八七年）、『天使・蝶・白い雲などいくつかの瞑想』（一九八七年）、『鶯——こどもとさむらいの16篇』（一九九〇年）、『ヴェルレーヌの余白に』（一九九〇年）、『萌えいづる若葉に対峙して』（一九九八年など。詩論に、『ロビンソン、この詩はなに？』（一九八八年）、『かんたんな混沌』（一九九一年）、聞き書きに『詩の話をするよう』（二〇〇三年）などがある。